



MFJ 公認 準国際競技会

鈴鹿サンデーロードレース第2戦



■開催概要

- シリーズ名称 : 2025鈴鹿サンデーロードレース第2戦
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数/241台
 - CBR250R Dream Cup.....30台
 - CBR250RR Dream Cup.....32台
 - インターJP250.....9台
 - ナショナルJP250.....22台
 - インターJ-GP3.....5台 (内、HRC NSF250R Challenge.....1台)
 - ナショナルJ-GP3.....12台 (内、HRC NSF250R Challenge.....8台)
 - インターJSB1000.....22台
 - ナショナルST600.....43台
 - インターST600.....16台
 - インターST1000.....24台
 - ナショナルST1000.....26台
- 開催日 : 2025年6月7日(土)・8日(日)
- 天候/路面 : (7日)曇り時々晴れ/ドライ、(8日)曇り時々晴れ/ドライ

★次回レース予定

2025鈴鹿サンデーロードレース第3戦

■開催日：2025年9月20日(土)・21日(日) ■会場：鈴鹿サーキット フルコース (5.821km)

■開催クラス：インターJSB1000、インター/ナショナルST1000・J-GP3・ST600・JP250、CBR250R Dream Cup、CBR250RR Dream Cup



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで
ご購入いただけます。
<http://www.battle.co.jp/>



今回のインターJSB1000には、2ヶ月後に迫った鈴鹿8時間耐久ロードレース第46回大会のテストを兼ねたチームも多数参戦したようだ

Series Sponsors



ファイナルラップまでバトルが続いたカテゴリー続出！ 大いに盛り上がった鈴鹿サンデー第2戦

2025鈴鹿サンデーロードレース開幕した4月20日(日)から約2か月の長いインターバルを経て、6月7日(土)・8日(日)に同シリーズ第2戦が開催された。

この鈴鹿サンデーロードレースは全日本ロードレース選手権へとつながる、さらには世界をも照準にできる競技志向の強い2輪レースシリーズ。ステップアップを目指す若手からレースを楽しむベテランまでもが一堂に会し、しのぎを削ることで知られている。前回の開幕戦ではインターJSB1000とインターST1000の2カテゴリーにおいて鈴鹿8耐第46回大会への出場権をかけて行われる選抜レース<トライアウト>が併催され、いつも以上に注目が集まった。

今回の第2戦には引き続いて鈴鹿8耐への参戦を決めているチームがテストを兼ねて参戦。それらのチームは6月6日(金)に行われた特別スポーツ走行から8日(日)の決勝レースまでの時間を有効に使い、じっくりとセッティングを煮詰めている姿が印象的だった。

また、7日(土)に開催された全カテゴリーの公式予選とCBR250R Dream CupおよびCBR250RR Dream Cupの決勝レース、翌8日(日)に行われた残る全カテゴリーの決勝レースも大いに盛り上がった。ストッククラスは特にバトルが激しく、インターST600のレースではファイナルラップの最終コーナー立ち上がりまでひと時も目が離せないバトルが繰り広げられた。さらにはインター／ナショナルJ-GP3のレースでは若手同士が周回ごとに抜きつ抜かれつのバトルを披露、最終ラップの逆転劇まで、見せ場を作った。

次回鈴鹿サンデーロードレース第3戦は厳しい残暑が予想される9月20日(土)・21日(日)の開催。このレースを境にシーズンが折り返すこともあり、ますますタイトル争いの激しさが増すこの第3戦にも是非ご注目いただきたい。



いつものように2Days大会の鈴鹿サンデー第2戦。6月7日(土)にはCBR250R/CBR250RR Dream Cupの公式予選と決勝レースが行われた

Series Sponsors



レースレポート(1)

■CBR250R Dream Cup

中沢寿寛が開幕戦の公式予選に続いてトップタイムをマークし、2戦連続のポールポジションを獲得する。ホールショットを奪ったのは3番グリッドスタートの秀崎隆。中沢がすぐに秀崎の前に出る。中沢、秀崎、6番グリッドスタートの山根頭のオーダーでオープニングラップを終了。中沢と秀崎が後続を一時的に引き離しにかかるが、4番グリッドスタートの堀絢仁が秀崎をパスして2台の間に割って入る。2周目のシケインで発生した混乱で転倒したマシンがあったことにより、中沢、2番グリッドスタートの林規夫のオーダーに。10台以上がトップ集団を形成し、周回ごとに順位を入れ替える激しいバトルを展開する。中沢と堀が頭ひとつ抜け出したが、堀がファイナルラップで転倒。中沢がトップチェッカーを受けた。



CBR250R Dream Cup表彰式(優勝:中沢寿寛、2位:秀崎隆、3位:林規夫)



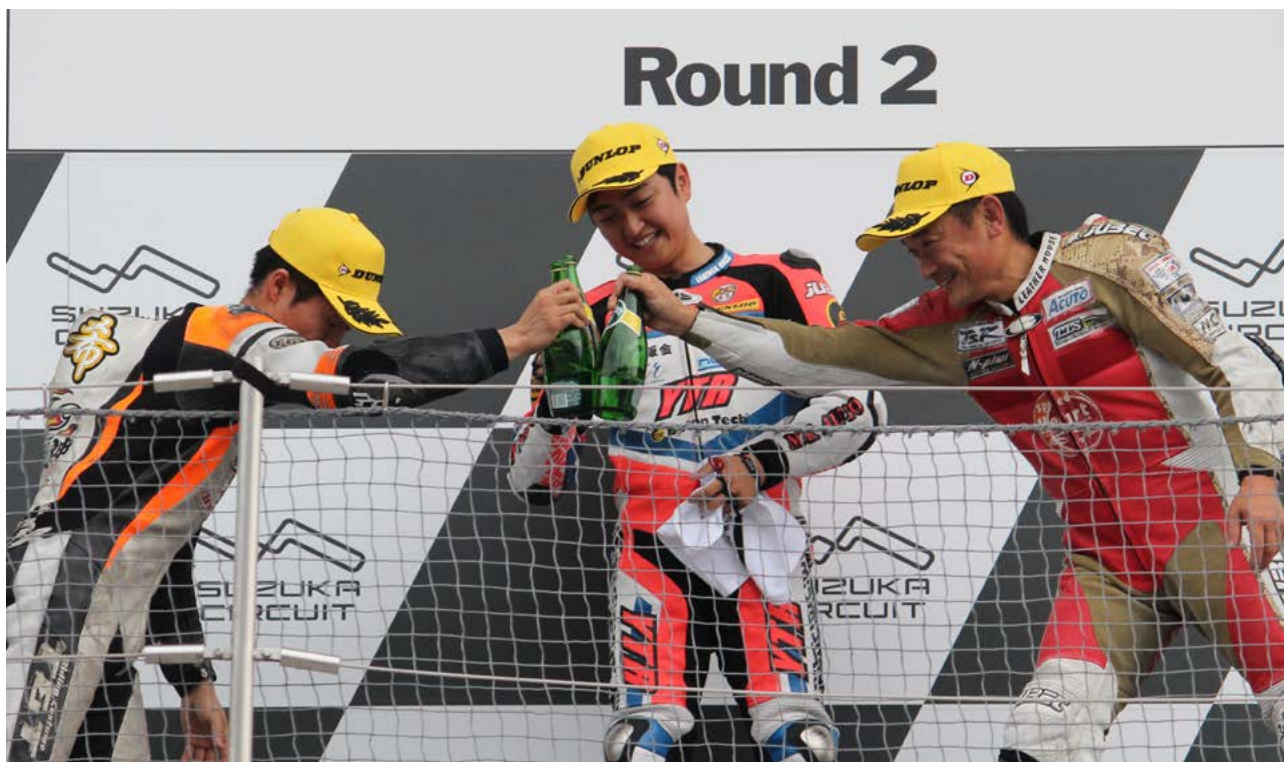
Series Sponsors



レースレポート(2)

■CBR250RR Dream Cup

藤田悠希が公式予選で唯一の2分32秒台となる2分32秒524をマーク。決勝レースではポールポジションからスタートした藤田の横から2番グリッドスタートの福田優弥が伸びていく。ホールショットを奪ったのはその福田。4番グリッドスタートの福井宏至が福田をパスしてトップに。それに藤田、3番グリッドスタートの中村敬司と続く。次第に福井、藤田、中村、大倉拓夢の4台が5番手以降を引き離してトップグループを形成。3周目には中村がトップに立つが、同じ周のシケインでは藤田が中村をパス。その後もトップ4台はテールtoノーズのバトルを展開する。大倉が6周目に若干遅れ、トップグループは3台での争いとなりかけたが、ファイナルラップで一気にトップに立った大倉が2連勝を飾る結果となった。



CBR250RR Dream Cup表彰式 (優勝:大倉拓夢、2位:藤田悠希、3位:中村敬司)



Series Sponsors

レースレポート(3)

■インター／ナショナルJP250

公式予選の序盤では竹本倫太郎と鈴木未来翔がポールポジション争いを展開。唯一の2分29秒台となる2分29秒914をマークし、ポールポジションを獲得した竹本が良いスタートを決め、ホールショットをゲット。それに3番グリッドスタートの鈴木(未)、2番グリッドスタートの鈴木悠大と続く。竹本はオープニングラップの東コース区間で早くも後続を引き離しにかかるが、再び追いついた鈴木(未)が竹本をパス。鈴木(未)、竹本、鈴木(悠)がトップグループを形成する。その3台は抜きつ抜かれつのバトルを展開。若干後方では船田俊希、南博之、澤合柊、三浦雄一が4番手争いを繰り広げる。鈴木(未)と竹本によるバトルはファイナルラップまで続いたが、鈴木(未)が総合トップでチェッカーを受けた。



インターJP250表彰式 (優勝: 竹本倫太郎、2位: 鈴木悠大、3位: 三浦雄一)



ナショナルJP250表彰式 (優勝: 鈴木未来翔、2位: 南博之、3位: 澤合柊)

Series Sponsors





MFJ 公認 準国際競技会
鈴鹿サンデーロードレース第2戦



■インター／ナショナルJP250



ナショナルJP250車両銘柄賞表彰式 (Honda賞: 鈴木未来翔、Kawasaki賞: 神吉龍成、YAMAHA賞: 中川空嶺)

Series Sponsors



レースレポート(4)

■インター／ナショナルJ-GP3・HRC NSF250R Challenge

公式予選では、まず知識隼和がタイミングボードのトップに。富樫虎太郎がそれを上回るが、2分20秒台に入れた知識がポールポジション。決勝レースでは知識がホールショットを奪うと、それに中嶋昂士、富樫、長谷川蒼馬、戸高倫太郎と続いてオープニングラップを終了する。富樫が2周目に中嶋をパス。戸高も長谷川をパスして4番手に浮上する。戸高と長谷川が次第に遅れ、知識、富樫、中嶋がトップグループを形成。6周目になるとそこから中嶋が若干離れ始め、知識と富樫による一騎打ち状態となるが、7周目の逆バンクでミスした知識を富樫がパス。同じ週のバックストレッチで知識がトップ奪還するとスパート。富樫もペースアップし9周目には知識に接近。最終ラップの激しい攻防の末、シケインで知識をパスした富樫が総合優勝を飾った。



インターJ-GP3表彰式(優勝:中嶋昂士、2位:戸高倫太郎、3位:金子寛)



ナショナルJ-GP3表彰式(優勝:富樫虎太郎、2位:知識隼和、3位:長谷川蒼馬)

Series Sponsors



レースレポート(5)

■インターJSB1000

伊藤勇樹が公式予選で他を圧倒する2分10秒497をマークし、ポールポジションを獲得。しかし、良いクラッチミートを披露したのは5番グリッドスタートの遠藤晃慶だった。伊藤が遠藤をパスしてトップに。オープニングラップの130Rで2番グリッドスタートの菊地純が2番手に振り返り、続くシグインでその菊地がミス。伊藤、遠藤、10番グリッドスタートの富江慧のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。伊藤は2分10秒台で周回し、2番手以降を引き離し続ける。菊地が3周目に再び2番手に浮上すると、富江とバトルを展開。菊地、三原壮紫、宮腰武が富江をパスする。最後までペースを緩めなかった伊藤が独走優勝。鈴鹿8耐の出場権を掛けた<トライアウト>が併催された開幕戦に続き、2連勝を決めた。



インターJSB1000表彰式 (優勝:伊藤勇樹、2位:菊地純、3位:宮腰武)



Series Sponsors

レースレポート(6)

■ナショナルST600

公式予選では森山渥がまず2分16秒421を記録。森山は自己ベストを更新する2分15秒014をマークし、ポールポジションを獲得する。2番グリッドスタートのターナー健人が良いクラッチミートを披露するが、ホールショットを奪ったのは森山。その森山、ターナー、4番グリッドスタートの田中壮途、3番グリッドスタートの芝本友暉のオーダーでオープニングラップを帰ってくると、予選でタイムが良かった森山とターナーが後続を引き離し始める。森山が一時的に単独トップとなるが、4周目になるとターナーが森山の背後に接近。しかし、同じ周の2輪専用シケインでターナーがオーバーラン。森山が再びターナーを離すが、その森山のマシンにトラブルが発生。これによりターナーが独走状態となり、初優勝を飾った。



ナショナルST600表彰式(優勝:ターナー健人、2位:田中壮途、3位:芝本友暉)



Series Sponsors

レースレポート(7)

■インター-ST600

コースイン直後に雨が降り出し、レッドクロスが出される中で行われた公式予選。1周のみのアタックにより、川本宜論がポールポジションを獲得。決勝レースではその川本の横から2番グリッドスタートの平城雄飛が伸びていき、ホールショットをゲット。平城に川本、3番手スタートの中村敬司と続く。中村は川本をパスすると、平城とトップ2を形成。中村は何度も平城に並び、プレッシャーを掛ける。4周目のシケインで中村が平城をパス、5周目の1コーナー進入では平城が前、とその後も順位を入れ替えながら続いた2台のバトルだが、5周目のシケインで平城が転倒。単独トップとなった中村も9周目に転倒、これで川本、笠井杏樹、塚原溪介、岩田凌吾の4台のバトルがトップ争いに。最終ラップで川本も転倒、その後トップを守った笠井がクラス初優勝を決めた。



インター-ST600表彰式 (優勝:笠井杏樹、2位:塚原溪介、3位:岩田凌吾)



Series Sponsors

レースレポート(8)

■インター-ST1000

公式予選では澤村元章がまず2分13秒948をマーク。片平亮輔が澤村を上回るが、片平をも上回る2分10秒141をマークした山中将基がタイミングボードのトップに立つ。決勝レースではその山中がホールショットをゲット。山中はオープニングから早くも後続を引き離しにかかる。その後方で2番グリッドスタートの吉廣光と3番グリッドスタートの片平がバトルを展開。4番グリッドスタートの中堀拓己がそれに続く。山中はオープニングラップ終了時点で2番手以降に2秒131のアドバンテージを築くと、2周目終了時点では4秒571と、さらに後続を引き離すことに成功。その間も吉廣、片平、中堀が激しいバトルを披露する。山中は2位の片平以降に14秒395ものアドバンテージを築き、ポールtoウィンを飾った。



インター-ST1000表彰式(優勝:山中将基、2位:吉廣光、3位:片平亮輔)



Series Sponsors

レースレポート(9)

■ナショナルST1000

開幕戦でポールtoウィン飾った古田浩が公式予選のアタック2周目に2分18秒041をマーク。そのタイムを上回るライダーは現れず、古田が2戦連続でポールポジションを獲得した。ウェット宣言が出されてスタートした決勝レースでその古田が集団に飲み込まれる。ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの池田寛之。それに3番グリッドスタートの小森直樹が続く。池田と小森はオープニングラップから早くも後続を引き離すことに成功。小森が池田をパスする。7番グリッドスタートの塩野仁史が池田の背後に迫ると、池田、小森を立て続けにパスしてトップに。6番グリッドスタートの杉本慎平がその塩野、小森をパスする。その後、リードを築いて単独走行となった杉本がトップチェッカーを受けた。



ナショナルST1000表彰式(優勝:杉本慎平、2位:塩野仁史、3位:小森直樹)



Series Sponsors

**Voice
of
Pick up
Riders**
-SUNDAY EDITION-

この日、キラリと光った
ライダーに一言一答

インターJSB1000で優勝した

伊藤 勇樹 選手

(Racing Project Team NAGANO & Team MATSUNAGA /

YAMAHA YZF-R1)



Q.公式予選ではダントツの2分10秒台をマーク。堂々のポールポジション獲得でしたね。

A. 特に組み立てなどはなく、落ち着いてタイムを出すことを考えていました。必ずポールポジションを獲得しようと思っており、その通りになったので、決勝レースに向けて安心できました。

Q.決勝レースでは独走状態になった後、終始安定した走りを披露しました。

A. スタートでは他ライダーに前に出られましたが、3コーナーでトップに立つことができました。その後は後ろを振り返ることなく、無事チェッカーを受けられるように集中しました。今回は実は予選と決勝でタイヤ1セットだけを使う作戦でした。タイヤマネジメントを意識して走りましたが、それもうまくいったと思います。

Q.今回の参戦は鈴鹿8耐のテストを兼ねていたのですよね。

A. 海外でレースがあるため、私は事前テスト全てに参加できるわけではありません。そのため今回はチームにお願いし、実戦を見越したメニューにしてもらいました。セッティングを詰めることもできましたし、今回は全てが想定していた通りに進んだと思います。チームに感謝しています。

Series Sponsors

